

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第28集

館林市内遺跡発掘調査報告書

TATEBAYASHI-SHINAI

館林市教育委員会

館林市内遺跡発掘調査報告書

TATEBAYASHI-SHINAI

館林市教育委員会

例 言

1. 本書は平成6年度に実施した館林市内の遺跡発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 調査は館林市教育委員会が主体となり実施したもので、その組織は次のとおりである。

教 育 長	高 瀬 利 一			
教 育 次 長	関 口 久 男			
主 管 課	文化振興課 (文化財係)			
文化振興課長	田 沼 俊 彦			
文化財係長	早 川 紀 正			
主 任	川 島 孝 男			
調 査 補 助	寺 内 景 子			
臨 時 職 員	石 井 悦 雄	石 川 栄 吉	尾 川 邦 代	
	坂 田 岩 吉	寺 内 義 正	野 口 信	
	林 正 行	早 野 茂		

3. 調査に伴う諸経費は、国及び群馬県より補助金を受け館林市が負担した。
4. 調査による出土遺物、調査記録、資料は館林市教育委員会で保管している。
5. 本書の取りまとめは、川島が行った。
6. 調査ならびに本書の刊行にあたり、関係諸氏、諸機関の御指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。

目 次

例 言

第 I 章 館 林 市 の 環 境	1
第 II 章 各 遺 跡 の 内 容	
第 1 節 大 道 北 遺 跡 A・B	3
A	4
B	6
第 2 節 天 神 遺 跡	8
第 3 節 館 林 城 跡 土 塁	13
第 4 節 下 遺 跡 (36 号 墳)	19
第 5 節 苗 木 遺 跡	26
第 6 節 高 根 ・ 外 和 田 遺 跡	29
抄 録	33

図 版 目 次

第1図	館林市の地形と調査された遺跡	2
第2図	大道北遺跡周辺図	3
第3図	大道北遺跡A調査区全体図	5
第4図	大道北遺跡B調査区全体図	7
第5図	天神遺跡周辺図	8
第6図	天神遺跡調査区全体図	12
第7図	館林城跡土塁周辺図	13
第8図	館林城跡土塁現況図	15
第9図	館林城跡土塁断面図	17
第10図	下遺跡周辺図	19
第11図	下遺跡遺構平面図	23
第12図	下遺跡調査区全体図	24
第13図	下遺跡出土遺物(1)	24
第14図	下遺跡出土遺物(2)	25
第15図	苗木遺跡周辺図	26
第16図	苗木遺跡調査区全体図	28
第17図	高根・外和田遺跡周辺図	29
第18図	高根・外和田遺跡調査区全体図	31

写 真 目 次

写真1	大道北遺跡A調査前	4
写真2	大道北遺跡A作業風景	4
写真3	大道北遺跡A 1トレンチ	4
写真4	大道北遺跡A 2トレンチ	5
写真5	大道北遺跡B調査前	6
写真6	大道北遺跡B重機による掘削	6
写真7	大道北遺跡B作業風景	6
写真8	大道北遺跡B 1トレンチ	7
写真9	大道北遺跡B 2トレンチ	7
写真10	天神遺跡調査前	9
写真11	天神遺跡重機による掘削	9
写真12	天神遺跡作業風景	9
写真13	天神遺跡 1トレンチ	10

写真14	天神遺跡 2 トレンチ	10
写真15	天神遺跡 3 トレンチ	10
写真16	天神遺跡 2 溝	11
写真17	天神遺跡 4 トレンチ 拡張部	11
写真18	天神遺跡 井戸	11
写真19	天神遺跡 4 トレンチ	12
写真20	館林城跡 土塁 調査前	14
写真21	館林城跡 土塁 調査前	14
写真22	館林城跡 土塁 重機による掘削	14
写真23	館林城跡 土塁 作業風景	16
写真24	館林城跡 土塁 1 トレンチ	16
写真25	館林城跡 土塁 2 トレンチ	16
写真26	館林城跡 土塁 1 トレンチ 断面	18
写真27	館林城跡 土塁 2 トレンチ 断面	18
写真28	下遺跡 調査前	20
写真29	下遺跡 作業風景	20
写真30	下遺跡 周溝 全景	20
写真31	下遺跡 周溝 全景	21
写真32	下遺跡 1 トレンチ	21
写真33	下遺跡 2 トレンチ	21
写真34	下遺跡 遺物 散布状況	22
写真35	下遺跡 出土遺物	22
写真36	下遺跡 出土遺物	22
写真37	苗木遺跡 調査前	27
写真38	苗木遺跡 重機による掘削	27
写真39	苗木遺跡 作業風景	27
写真40	苗木遺跡 調査区 全景	28
写真41	高根・外和田遺跡 調査前	30
写真42	高根・外和田遺跡 重機による掘削	30
写真43	高根・外和田遺跡 作業風景	30
写真44	高根・外和田遺跡 1 トレンチ	31
写真45	高根・外和田遺跡 2 トレンチ	31

第I章 館林市の環境

地理的環境

館林市は、山がちな群馬県の南東部、関東平野の北辺に位置し、東南北をそれぞれ茨城県、埼玉県、栃木県の3県に近距離のうちに囲まれている。総面積60km²余りの市域は、東西15km、南北8kmと東西に長く、人口は約78,000人を擁し、東毛と呼ばれる当地方の中核都市の一つである。また、県都前橋市まで約50km、東北自動車道館林インターから都心まで60km余りと首都圏との結び付きも強い。

次に地形的に本市を概観すると、一見平坦に見える本市も、その中央部を東西の帯状に延びる標高20m前後の「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地（洪積台地、内陸古砂丘）と、この洪積台地を取り囲むように広がる標高15m前後の沖積地（自然堤防、低湿地、池沼、河川等）とに大別できる。県下でも地盤の低い地域に属しており、更に全体的に北西から南東へ向けて緩く傾斜する傾向が見られ、これは関東造盆地運動の影響によるものと考えられるが、台地面と低地面との比高差も北部・西部は大きく、南部・東部では小さくなっている。

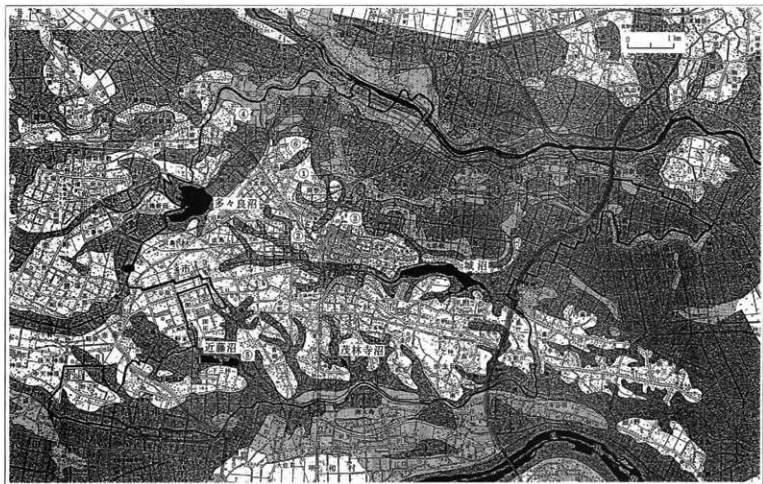
起伏の少ない本市であるが、この洪積台地には多くの開析谷が樹枝状に刻まれ、城沼、茂林寺沼、蛇沼等の池沼を伴う大きなものから数10m単位の小さなものまで大小様々なものがあり、景観上の一つの特徴となっている。

市内の遺跡

昭和58年から63年にかけて実施された市内遺跡詳細分布調査での館林市内の遺跡数は合計で144ヶ所、時代別には旧石器時代—3、縄文時代（縄文時代の遺物のみ散布）—13、弥生時代—0、古墳時代から平安時代を含むもの—96（うち縄文時代の遺物が見られるもの23）、古墳—17（延べ25基）、中世産土—1、中世城館址—12、近世城館址—2が推定されている。その分布の在り方を見ると、前述の本市中央部の台地とこれに接する池沼、低湿地との間に密接な関わりのあることを示しており、台地の周辺には城沼、近藤沼、茂林寺沼、蛇沼などその周囲に遺跡分布の濃い池沼が点在している。更に一つの池沼でも隣接する遺跡間でその属する時代に一定の傾向の見られる場合があり、時代ごとに幾つかのブロックに分けることができる。また、全体的な特色として、縄文時代の後・晩期から弥生時代、古墳時代初頭へかけての遺跡が少ないことが挙げられる。

この中で、これまでの発掘調査によって住居址の確認された遺跡は、古墳時代の住居址30軒が調査されている近藤沼北岸の北近藤第一地点遺跡、縄文時代の住居址7軒が確認された蛇沼東岸の間堀遺跡など12ヶ所である。

第1図 館林市の地形と調査された遺跡



- ① 大道北遺跡 ② 天神遺跡 ③ 館林城跡土塁 ④ 下遺跡 ⑤ 苗木遺跡 ⑥ 高根・外和田遺跡

第Ⅱ章 各遺跡の内容

第1節 大道北遺跡(だいたいせき)A・B

立地と環境

大道北遺跡は、東武鉄道佐野線渡瀬駅の西1.2km、県道足利・館林線の東側で邑楽・館林台地の北縁に位置している。北・東は渡良瀬川の氾濫原である沖積低地に面し、西には邑楽・館林台地を閉折し高根峠排水路を谷底とする谷が南北に走っている。遺跡地は周囲三方を低地に囲まれた半島状台地の付け根部分に広がっている。当遺跡は、市街地にも近くその拡大に伴って、今後開発の見込まれる地域である。

「館林市の遺跡」には、古墳時代から平安時代へかけての遺物散布地として記載されている。周辺には、南東に隣接して縄文時代及び古墳時代から平安時代へかけての岡野・屋敷前・岡遺跡、南西にはやはり隣接して奈良時代から平安時代の新倉前遺跡、北西には谷を隔てて高根古墳群、古墳時代の住居址等の確認された高根・外和田遺跡、中世城館址の高根城跡などがある。



第2図 大道北遺跡周辺図

大道北遺跡 A

経 緯

大道北遺跡Aの調査は、館林市岡野町字大道北430-6、-7の地権者岡田和二、よし江氏の個人住宅建設に伴う事前確認調査であった。

館林市教育委員会では、この土地の埋蔵文化財の取り扱いについて、同氏の代理人より問い合わせを受け、協議を開始するとともに現地確認を行った。

開発予定地は岡野集落の西部、遺跡地の南端に位置し、標高は約27m、周辺を古くからの宅地に囲まれた中で畑地となっていた。現地には摩滅した若干の土師質土器片の散布が見られ、また当遺跡では既往の発掘調査例がなく、遺構の存否等地下の状況把握を要すると判断されたため、再度協議を行い試掘調査を実施することで合意された。

調査の概要

開発予定地に東西のトレンチ2本を設定し、南側のものを1トレンチ、北側のものを2トレンチとし、重機による表土除去後精査を行った。

この結果表土からローム面までの深さは1トレンチで60cm、2ト



写真1 大道北遺跡A調査前



写真2 大道北遺跡A作業風景



写真3 大道北遺跡A 1トレンチ

レンチでは80cmであった。1トレンチには、溝状の掘り込みを3本、2トレンチでは竪穴状の掘り込み2基と土坑1基が確認された。

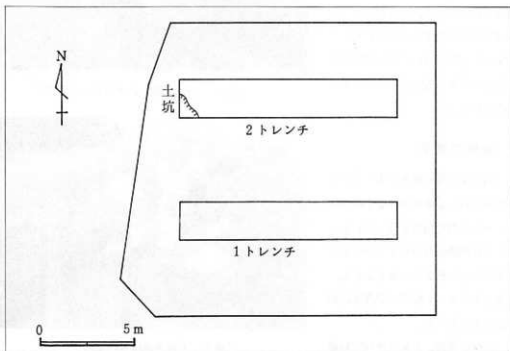
1トレンチの3本の溝状の掘り込みはいずれも南北方向で、幅は50cm～80cm、ルーム面からの深さは平均30cmで、総てトレンチ外へ延びていた。2トレンチの2基の竪穴状の掘り込みは、トレンチの中央部と東半部北壁寄りに各1基



写真4 大道北遺跡A 2トレンチ

確認された。中央部のは長径が2.5mほどの楕円形、一方はトレンチ外へ延びる不定形なもので、ともに深さは10cmであった。1トレンチのものも含め遺物の出土はなく、遺構としては捉え難いものと思われた。

また2トレンチ西端の土坑は、トレンチ拡張が不可能であったため規模は不明であるが、近世から近代のものと思われる焙烙等の軟質陶器片、陶磁器片等が覆土から均一に出土し、その状況から、これらのものを遺棄する目的で掘削され埋め戻されたことも考えられる。



第3図 大道北遺跡A調査区全体図

大道北遺跡 B

経 緯

大道北遺跡 B の調査は、館林市岡野町字大道北 444-3 の地権者佐藤広和、恵美子氏の個人住宅建設に伴う事前確認調査であった。

館林市教育委員会では、この土地の埋蔵文化財の取り扱いについて、同氏の代理人より問い合わせを受け、協議を開始するとともに現地確認を行った。

開発予定地は岡野集落の北西部、遺跡地の東北縁に位置し、標高は 27 m 弱で、畑地となっていた。現地踏査では摩滅した若干の土師質土器片の散布が見られ、また当遺跡では既往の発掘調査例がなく、遺構の存否等地下の状況把握を要すると判断されたため、再度協議を行い試掘調査を実施することで合意された。

調査の概要

開発予定地に東西のトレンチ 2 本を設定し重機による表土除去後トレンチ内の精査を行った。トレンチは南側のものを 1 トレンチ、北側のものを 2 トレンチとした。表土よりローム面までの深度は 40 cm 前後であった。

調査の結果、トレンチ内では遺



写真 5 大道北遺跡 B 調査前



写真 6 大道北遺跡 B 重機による掘削



写真 7 大道北遺跡 B 作業風景

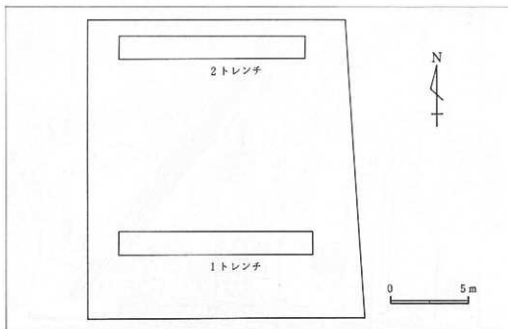


写真8 大道北遺跡B 1トレンチ



写真9 大道北遺跡B 2トレンチ

構、遺物ともに確認されなかった。また、トレンチの断面にはローム面と表土の間にロームの漸移層と思われる堆積が見られ、大きな掘削等受けた様子はなく、土地の保存状況は比較的良好なものと思われた。



第4図 大道北遺跡B調査区全体図

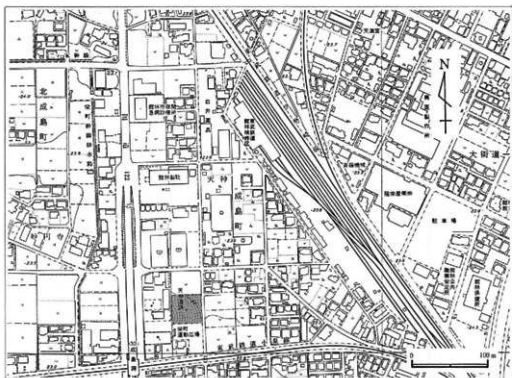
第2節 天神遺跡(てんじんいせき)

立地と環境

天神遺跡は、東武鉄道館林駅の北西約750mに位置し、館林市中央部の市街地西側に隣接している。遺跡地の西には国道122号線、南に東武鉄道小泉線が走り、ともに両交道路から50m前後の距離にある。地形的には邑楽・館林台地の内奥部であるが、南方550m余りにはこの台地を南北に分け東流する鶴生田川が流れ、西側にはこの鶴生田川へ向かって北から開折する小規模な谷が走っている。遺跡地周辺は、市街地化が進み、遺構等の遺存が推定される部分が小さく、市街地化の進んだ地域に推定された数少ない遺跡の一つである。

「館林市の遺跡」には、平安時代の遺物散布地として記載され、周辺の遺跡には、北東に縄文時代及び平安時代の大街遺跡、東には館林城の城下町、南には平安時代の柴町遺跡、南西には縄文時代及び平安時代の二本松遺跡、西にはいずれも平安時代の妙円寺1遺跡、妙円寺2遺跡、諏訪北遺跡がある。

付近は市街地に隣接し、前述のとおり館林駅に近く、国道122号線沿いでもあることから宅地化が進み新たな開発の余地は少ないが、今後残された畑地等の開発、再開発の見込まれる地域である。



第5図 天神遺跡周辺図

経 緯

天神遺跡の調査は、館林市大字成島字天神1934の地権者新井良雄氏の共同住宅建設に伴う事前確認調査であった。

館林市教育委員会では、この土地の埋蔵文化財の取り扱いについて、同氏の代理人より問い合わせを受け、協議を開始するとともに現地確認を行った。

一帯での市街地化が進み推定された遺跡地の小さい当遺跡で、開発予定地はその中央部にあたり、畑地となっていた。現地及びその周囲では、摩滅した若干の土師質土器片の散布が見られ、また当遺跡での既往の発掘調査例がないことから、遺構の存否等地下の状況把握を要すると判断されたため、再度協議を行い試掘調査を実施することで合意された。

調査の概要

開発予定地に東西のトレンチ4本を設定し、重機による表土除去後トレンチ内の精査を行った。トレンチは南から順に1、2、3、4トレンチとした。表土よりローム面までの深さは平均して75cmであった。

調査の結果、円形の竪穴状の掘り込みが1基、溝状の掘り込み3



写真10 天神遺跡調査前



写真11 天神遺跡重機による掘削



写真12 天神遺跡作業風景

本、井戸状の土坑が1基確認された。

円形の掘り込みは、1トレンチの中央やや東寄りの南壁際に検出された。当初溝状の掘り込みの起点と思われたためトレンチを南へ50cmほど拡張したが、直径約1m、深さ20cmほどの円形の堅穴状の掘り込みであることが確認された。

遺物の出土はなかった。

3本の溝は、1トレンチで確認されたものを1溝、3トレンチのものを2溝、4トレンチのものを3溝とした。1溝は1トレンチの東端に南北の方向をもって確認された。2トレンチ掘削後2トレンチ内に1溝に続く土層の変化が見られなかったため、起点を追ってトレンチを北へ拡張した。起点はトレンチ北壁より70cmほどのところにあり、確認できた規模は、幅がトレンチの南壁で1.4m、長さは調査区外の南へ延び、深さは湧水により未確認となった。遺物の出土はなかった。2溝は、3トレンチ中央を斜めに横切るように東西方向で確認されたため、溝の延長上と思われる部分に、東は4トレンチをずらし、西は3トレンチの西側、隣地との境界際にサブトレンチを設定した。その結果、東西ともに調査地外へ延びているも



写真13 天神遺跡1トレンチ



写真14 天神遺跡2トレンチ



写真15 天神遺跡3トレンチ

のと推定された。確認された規模は、幅が1.3 m、深さはやはり湧水により未確認となった。出土した遺物には、「大永三年」（1523年）、「己巳」（可能性として1499年、1509年、1569年か）と読める刻字のある板碑の破片と思われるもの、五輪塔の火輪の一部、内耳鍋等軟質陶器片、土師質土器片等が覆土中より均一に出土した。

3溝は、4トレンチの西半部の中央西寄りに南北の方向をもって確認された。1溝同様隣接する3トレンチにその延長が見られなかったため、トレンチを南側へ拡張し起点を追った。起点はトレンチ南壁より2.8 mのところであり、幅は約1 m、長さは調査地外の北側へ伸び、深さは湧水により確認できなかった。出土遺物は、五輪塔の火輪、基壇と思われるものの一部が出土した。

井戸は、4トレンチの東半部中央やや東寄り、南壁際に検出した。長径95cm、短径90cm弱の東西に幾分長いほぼ円形であった。深さは湧水により確認できなかった。遺物としては、水面下50cm、掘削底面下10cmほどのところにかなり大型の石製品が認められたが、激しい湧水のため掘進が困難となり未調査となったものがあった。



写真16 天神遺跡2溝



写真17 天神遺跡4トレンチ拡張部

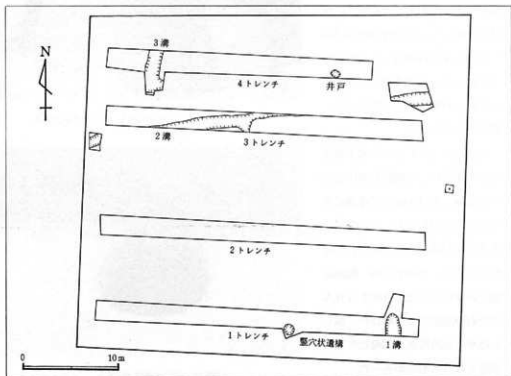


写真18 天神遺跡井戸

今回の調査では溝と井戸が検出されたが、遺物の出土状況は覆土中より均一であり、土質もほぼ一層であったことから人為的に埋め戻されたものと思われる。これら溝、井戸が掘削され、また埋め戻された時期、性格、井戸と溝との関係など特定することはできなかったが、特に2溝から中世の寺院に関わると思われる遺物が出土し、当遺跡の西方に小字名に「妙円寺」があり、この付近に伝わる言い伝えの中にも「妙円寺」という寺院があったことを物語るものがあることから、寺院との何らかの関係を思わせる。なお幕末に作成された「封内境界図誌」には、この付近に字名として「妙円寺」は既に記されているものの寺院のあった様子は描かれていない。また、この小字名「妙円寺」を冠する妙円寺1遺跡、妙円寺2遺跡、諏訪北遺跡については寺院に関わる遺跡である可能性が考えられる。



写真19 天神遺跡4トレンチ



第6図 天神遺跡調査区全体図

第3節 館林城跡土塁(たてばやしじょうせきどるい)

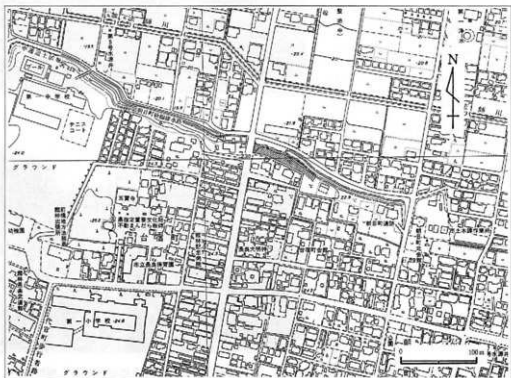
立地と環境

館林城跡は、現在館林市子ども科学館のある本丸を中心とした牙城部と、その西方で市街地となっている城下町とからなっている。牙城部は城沼の北岸で半島状に沼へ突き出す洪積台地上にあり、周囲を取り巻く沼や低湿地を巧みに利用した天然の要害となっていた。城下町はこの牙城部の西側に広がる同じ洪積台地上に形成され、その周囲を堀と土塁によって囲まれていた。

その中で開発予定地は、城下町の北辺で、北西隅から東へ延びる土塁と思われる部分に当たり、城下町を南北に縦貫していた日光脇往還の佐野口付近から東の部分であった。開発予定地南側の旧城下町は市街地となっており、低地が広がっていた北側も埋め立て等近年宅地化が進んでいる。

経緯

朝日町土塁の調査は、館林市朝日町1155-1他の地権者山崎三千男氏の宅地造成に伴う事前確認調査であった。



第7図 館林城跡土塁周辺図

館林市教育委員会では、この土地の開発にあたり、地権者の代理人より同地の埋蔵文化財の取り扱いについて問い合わせを受け、協議を開始するとともに現地確認を行った。

開発予定地は城下町を取り巻いていた土塁と推定される部分で、北側にはこの土地に接して堀の名残と思われる帯状の帯水域が延びていた。現況では北側の低地に面して土塁様に急な傾斜となっていたが、土塁状の盛り土はなく、盛り土部分は既に削平されたものと思われた。しかし、郭外に面する前述の北側斜面は土塁の形状をよく残しており、断面に土塁構築の状況が残されていることが予想されたため、現況測量の後、試掘調査を実施することで合意された。また、現況測量には航空測量を実施し、開発者のご協力をいただいた。

調査の概要

東西に細長く延びる調査地に、土層の状況を確認するため斜面に直行するように南北のトレンチを2本設定した。うち東側の1本は調査地中央付近にやや張り出した部分があったためその部分に設定し1トレンチとし、西側のものを



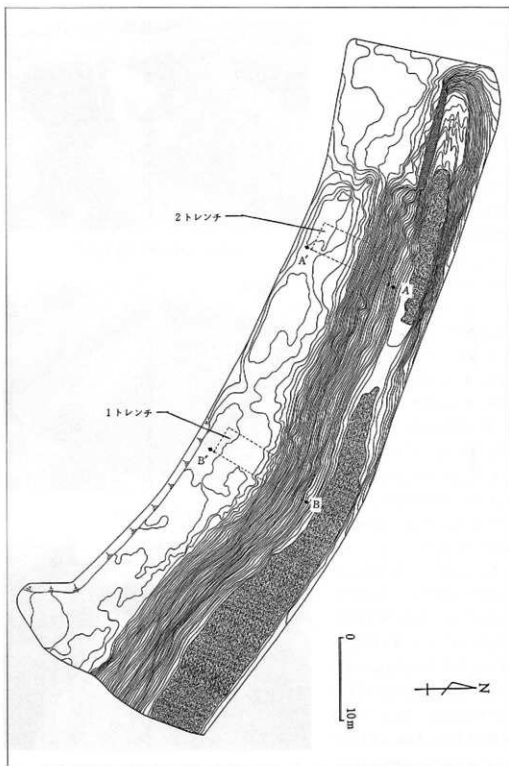
写真20 館林城跡土塁調査前



写真21 館林城跡土塁調査前



写真22 館林城跡土塁重機による掘削



第8図 館林城跡土塁現況図

2トレンチとした。

当初、調査地と郭内と思われる調査地の南側とでは若干の比高差があるのみだったため、土塁は殆ど削平されてしまったものと思われた。しかし、調査の結果1トレンチと2トレンチとでは土層の堆積状況に違いが見られたものの、特に1トレンチ断面では土塁状の堆積状況を良く残しており、いずれも人為的に築造された土塁であることを思わせた。

1トレンチでは、山なりの土塁の断面形状が良く現われており、土質の異なる土を何層にも分けて積み上げていった様子が窺われた。断面は表土層を除いて土質、堆積状況から概ね6層に分けられた。Ⅰ層はほぼ均一な土層で、土師質土器片を含み土塁の内側を埋めた後世の埋土とも思われる。Ⅱ層は灰白色の粘土を主体とした層で、Ⅲ層は灰白色の粘土とローム土との混層、Ⅳ層はローム土を含んだ黒褐色系土層で多くの縄文土器片を含んでいた。Ⅴ層の堆積土はⅣ層とほぼ同じだが、Ⅱ～Ⅳ層の堆積の方向が土塁の内側斜面と平行するように斜めであったのと異なり水平方向となっていた。Ⅳ層同様縄文土器片が多量に混入していた。それとロームの地山となって



写真23 館林城跡土塁作業風景



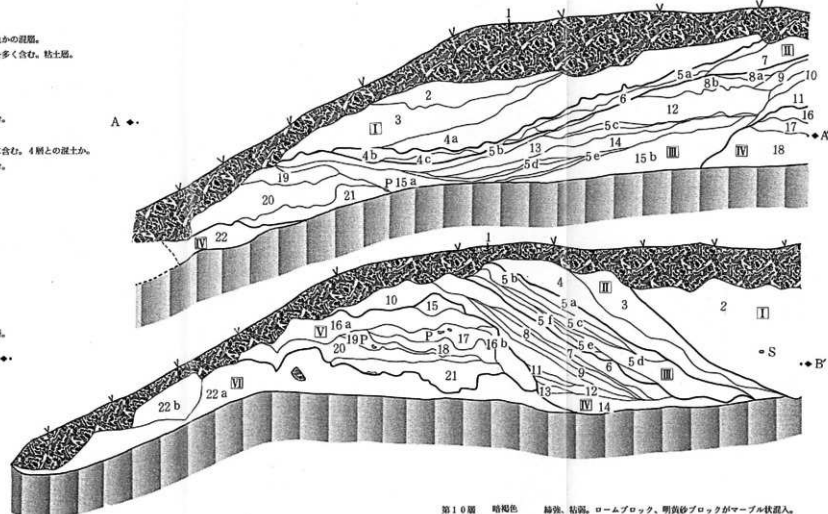
写真24 館林城跡土塁1トレンチ



写真25 館林城跡土塁2トレンチ

A-B' 土層注記 (2 トレンチ)

- 第1層 黒褐色 締、粘強。竹根による擾乱の黄土層。
 第2層 暗褐色 締育、粘強。赤っぽい軽分多量を含む砂状粘土層。何色かの混層。
 第3層 明褐色 締強、粘強。第2層より黒色のブロックや白色の粘土を多く含む。粘土層。
 第4層 暗褐色 締強、粘中や弱。白色粘土多量。赤色黒色粘土混じる。
 第5層 黄褐色 3層より小ブロック状。
 第5a層 暗褐色 締強、粘中や弱。黒褐色の表土層に似た土を多量に含む。
 第5b層
 第5c層
 第5d層
 第6層 鈍い黄褐色 締育、粘強。白、明黄褐色系粘土ブロックを多量に含む。4層との混土が。
 第7層 鈍い黄褐色 締中や弱、粘強。大きなロームブロックを多量に含む。
 第8層 褐色 締育、粘強。ロームブロックを少量に含む。
 第9層 暗褐色 締中や弱、粘強の均質。
 第10層 褐色 締中や弱、粘強の均質。
 第11層 暗褐色 締中や弱、粘強の均質。
 第12層 鈍い黄褐色 締強、粘強。ローム粒子含む。均質。
 第13層 鈍い黄褐色 締育、粘強。ローム粒子均等に含む。
 第14層 鈍い黄褐色 締育、粘、若干弱。ロームブロックを多量に含む。
 第15層 鈍い黄褐色 締育、粘中や弱、均質。
 第15a層
 第15b層
 第16層 黄褐色 締、粘弱。ロームへの擾乱弱。
 第17層 黄褐色 締育、粘10層より強。黒色赤土のブロックを含むローム層。
 第18層 明黄褐色 締、粘強。ローム層。
 第19層 黒褐色 締若干弱、粘弱。ローム粒子若干含む。均質。
 第20層 暗褐色 締若干弱、粘弱。ローム粒子若干含む。均質。
 第21層 褐色 締、粘弱。ローム粒子中や多量に含む。
 第22層 明黄褐色 締、粘弱。ローム層粘弱。



B-B' 土層注記 (1 トレンチ)

- 第1層 黒褐色土 現代の表土。竹根による擾乱。多い。
 第2層 暗褐色 締、粘強。土層内側の黄土心。粒子的質。人工堆積。
 第3層 黄褐色 締、粘強。土層内側の黄土心。粒子的質。人工堆積。
 第4層 灰褐色 締、粘強。酸化鉄混入白色粘土。細砂粒の混入。
 第5層 黄褐色 締強、粘中。黒褐色土。灰褐色粘土ブロック。暗赤褐色純砂ブロックの混土層。
 第5a層 赤ブロックの大きい層に d-e-f-a-b-c-b
 第6層 オリーブ褐色 締強、粘弱。明褐色ブロックが下方多量混入。
 第7層 オリーブ褐色 6層と類似だがブロックが小さく、全体的に混入。
 第8層 黒褐色 締強、粘強。明褐色ロームブロックまばらに混入。
 第9層 暗褐色 締強、粘弱。白色砂粒。全体的に混入。明黄砂ブロック中量混入。

- 第10層 暗褐色 締強、粘強。ロームブロック、明黄砂ブロックがマール状混入。
 第11層 暗褐色 締、粘弱。粘土。色調均質。
 第12層 暗褐色 締、粘弱。黒褐色と明褐色ブロックの混土層。
 第13層 暗褐色 締強、粘強。ローム微粒子少量混入。粘土、色調均質。
 第14層 褐色 締強、粘強。ローム粒子中量混入。
 第15層 暗褐色 締、粘弱。竹根による擾乱が多い。
 第16a層 黄褐色 締、粘弱。ローム、黄土、微粒子少量混入。
 第16b層 褐色 粘弱、粘強。ローム、黄土、カーボンブロックが少量混入。
 第17層 暗褐色 締育、粘強。ローム粒子多量混入。
 第18層 オリーブ褐色 締、粘弱。粘土。色調均質。
 第19層 暗褐色 締、粘弱。ローム微粒子少量混入。
 第20層 暗褐色 締、粘弱。黒褐色土とロームブロックとの混土層。カーボン、黄土微粒子少量混入。風文土層片が多量混入。
 第21層 黄褐色 締、粘強。地山の基盤層(ローム層)。
 第22層 明黄褐色 締、粘強。地山の基盤層(ローム層)。
 第22b層 明黄褐色 22層と同層だが、部分的に竹根による擾乱が多い。

土層断面一段階に引ける黄土層が、17層以下で竹根が入り込んでい

第9図 館林城跡土層断面図

いたVI層の合計6層である。この土塁を築造していった状況については、初めにVI層のローム層を大まかに整形し地盤とし、V層で土塁の基本的な形状を造り更にIV層、III層、II層と積み上げていったものと思われる。またIV、V層に含まれていた縄文土器片については、調査地の南東に近接して縄文時代の遺跡として推定されている朝日町遺跡があり、この遺跡との関連を考えたい。土塁築造に際して南側の土を使ったことが想定される。

2トレンチの断面の状況は、1トレンチで見られたようなはっきりとした土塁の形状は認められなかったものの、調査地が自然堆積による地形ではなく人為的に造られたものであることを窺わせた。層位は2トレンチでは4層に分けられた。I層は灰色、黄褐色系の砂粒粘土層、II層はI層と黒色系

土との混層、III層は黒褐色系土に部分的に多量のローム土を含む層で、IV層はローム層の地山である。土器片については1トレンチに比較し混入は少なかった。築造の状況については、やはりローム層を整形し地盤を造り、III層、II層、I層と積み上げていったものと思われるが、明確に土塁を推定させる堆積ではなかった。

1トレンチと2トレンチの層位の違いについては、土塁築造時点での地形の違いによる築造方法の変更、あるいは両トレンチ部分での築造時期の違い（災害等による修復）等が考えられ、築造方法に差異が見られるものの、今回の調査地は城下町を取り囲む人為的に築造された土塁であると考えたい。



写真26 館林城跡土塁1トレンチ断面



写真27 館林城跡土塁2トレンチ断面

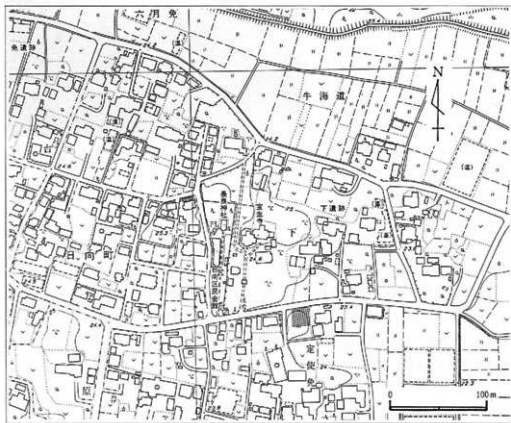
第4節 下遺跡(36号墳)(しもいせき)

立地と環境

下遺跡は、館林市の北西部、北を矢場川、南は多々良沼の北方に広がる低湿地に挟まれた台地の東端付近に位置する遺跡の一つで、台地の縁辺にあたり、低地との比高差の小さい低台地上に広がっている。西方800m程に東武鉄道伊勢崎線多々良駅、600m余り南には国道122号線が東西に走っている。

当遺跡は、「館林市の遺跡」の中で古墳時代及び平安時代の遺物散布の見られる埋蔵文化財包蔵地として記載されている。周辺の遺跡には、西にやはり古墳時代及び平安時代の六月免遺跡、日向古墳群が接し、下遺跡の東を北流する多々良川の対岸には中世の城館址として木戸城跡がある。

現在この付近には目立った開発はなく、田園風景の広がる静かな農村地域となっている。しかし、前述の多々良駅、国道にも近く、やや南に離れているが近年住宅団地の造成もあり、開発の見込まれる地域である。



第10図 下遺跡周辺図

経 緯

下遺跡の調査は、館林市日向町字定使免271-7の開発者小宮宏之氏の個人住宅建設に伴う事前確認調査であった。

館林市教育委員会では、小宮氏の代理人より、同地の開発に際し埋蔵文化財の取り扱いについて問い合わせを受け、協議を開始するとともに現地確認を行った。

開発予定地は、遺跡地の西縁に近く、南へやや下る傾斜地となっており、標高は24m余りで畑地となっていた。現地確認では該地に遺物は見られなかったものの、周辺には若干の遺物散布が見られ、また同遺跡での調査経緯がないことから、遺構の存否等地下の状況の把握が必要と判断され、以上の状況を踏まえ、再度協議を行い、試掘調査を実施することで合意された。

調査の概要

開発予定地に南北のトレンチ2本を設定し東側のものを1トレンチ、西側のものを2トレンチとし重機による表土除去後、トレンチ内の精査を行った。表土よりローム面までの深さは平均して90cm前後であった。

トレンチ内には、1トレンチの



写真28 下遺跡調査前



写真29 下遺跡作業風景



写真30 下遺跡周溝全景

北半部にトレンチを斜めに横切るように大きな溝状の土層の変化が見られた。そのためこの溝状の掘り込みの規模、性格、形状を確認するために1トレンチの拡張を行った。また1トレンチの南半部及び2トレンチには遺構と思われる掘り込み等は見られなかったため、層位確認のための2トレンチ南半部を残し、排土置場として埋め戻しを行った。

トレンチ精査後、調査は1トレンチを斜めに横切っていた溝状の掘り込みに集中して行った。その結果、ルーム面上に確認できたこの溝の規模は、幅3m弱、深さは70cm内外、長さは12.5m、南東側では調査地内の末端付近で掘り込みを浅くしながら更に隣地へ延び、北西側は道路によって攪乱され途切れていた。方向は、この溝の南西に中心を持つ円弧状にやや湾曲しているようにも思われたが、北西から南東へほぼ直線であった。断面の形状は毛抜堀様に曲線的な丸底となっていた。出土遺物は、溝の底付近から土師器の環4個体、甕、手握土器、胴部の最大径が約70cmに及ぶ須恵器の大甕、ほぼ完形のやはり須恵器の壺各1個体などであった。

この溝の性格については、今回



写真31 下遺跡周囲全景



写真32 下遺跡1トレンチ



写真33 下遺跡2トレンチ

の調査及びこの下遺跡の西に近接して日向古墳群があることから、明確に墳輪のものと思われる破片の出土はなかったものの古墳に伴う周溝であることが推定された。そのため地番等を再確認した結果、「上毛古墳総覧」所収の『多々良村（古墳番號）第三六號（形状）圓型（現状）山林（發掘の有無）無（大字）日向（字）定使免（番地）甲二七一ノ二（地目）畑（面積）五畝一〇歩（大サ）七八尺（高サ）七尺（備考）「石柙アリシトイフ 葦石アリ」』に該当するものと思われた。現状では既に墳丘は失われており、調査面積もこの周溝全体を確認できる広さではなかったため、「上毛古墳総覧」によるしかないが、この資料と周溝の湾曲の状況、また開発予定地の南側、2トレンチの南に隣接して準大程度の礎が散乱しており、これらの礎が石室の裏込め石である可能性のあることを考えると、2トレンチの南に主体部を備えた円墳であったことが推定される。この古墳の築造時期については、出土遺物から古墳時代後期を考へたい。



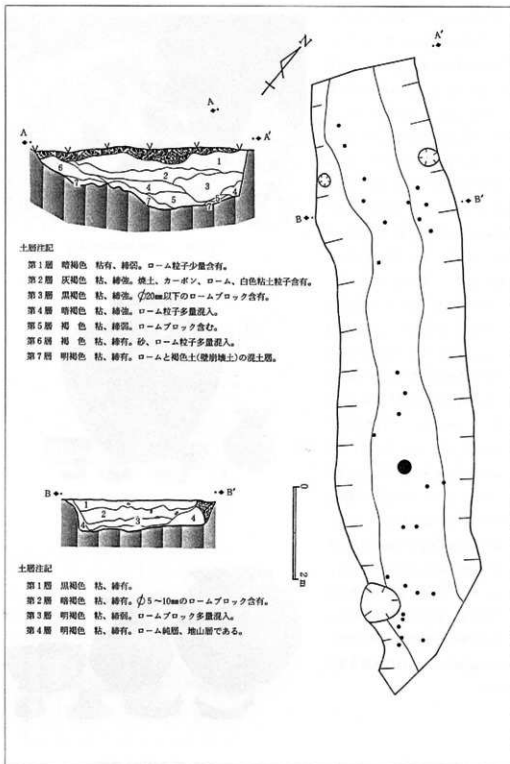
写真34 下遺跡遺物散布状況



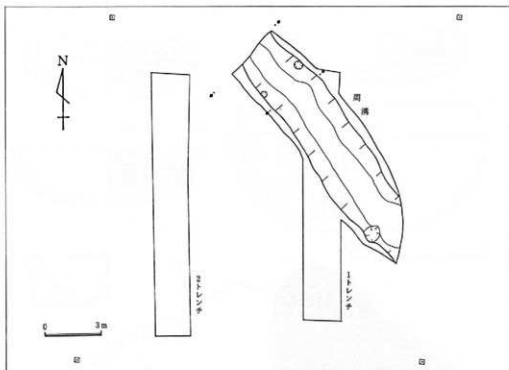
写真35 下遺跡出土遺物



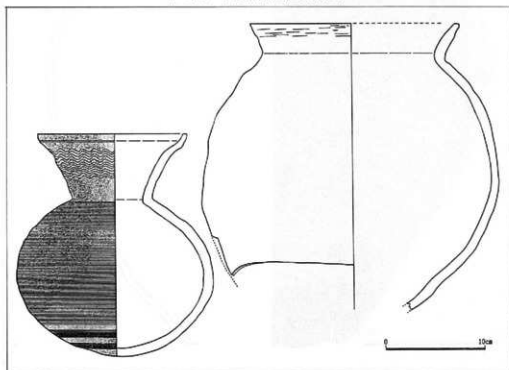
写真36 下遺跡出土遺物



第11図 下遺跡遺構平面図

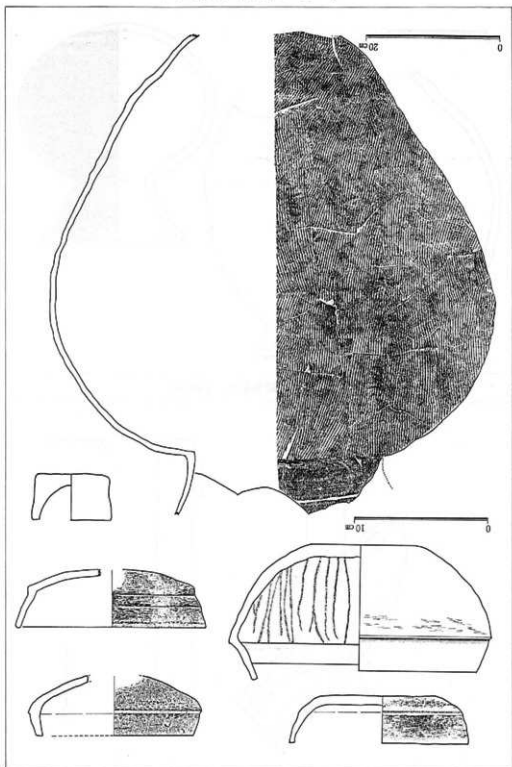


第12図 下遺跡調査区全体図



第13図 下遺跡出土遺物(1)

第14図 下遺跡出土遺物(2)



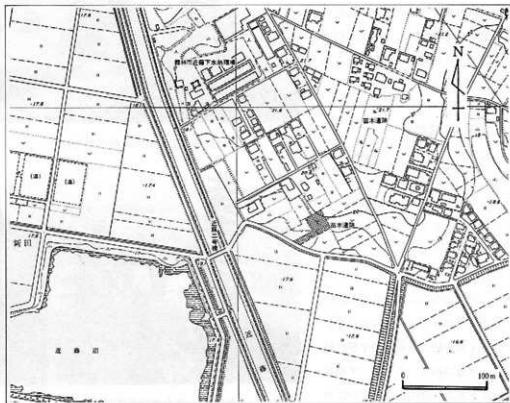
第5節 苗木遺跡(なえぎいせき)

立地と環境

苗木遺跡は、館林市立第三中学校の西約500mの邑楽・館林台地の南縁に位置している。南には近藤沼とこれを取り巻く低地が広がり、西北方には近藤沼へ向かって北から南へこの台地を開析する大きな谷が延び、東方にも同様の小さな谷がある。周囲三方を低地に囲まれた半島状になっている。

当遺跡は、「館林市の遺跡」の中で古墳時代及び平安時代の遺物散布地として記載されている。周辺の遺跡には、東側に縄文時代及び平安時代の萩原遺跡、その南に中世城館址の青柳城跡、南側の近藤沼対岸には平安時代の稲荷前遺跡、北側にはやはり平安時代の苗木西遺跡、西北方の谷の対岸には古墳時代の住居址の確認されている北近藤第一地点遺跡及び南近藤遺跡などがある。

開発予定地は、南の低地へ下る傾斜地上で遺跡地の南縁となっていた。背後の台地上は既に宅地化が進んでおり、北へ600m程の所には国道354号線が走り今後開発の見込まれる地域である。



第15図 苗木遺跡周辺図

経 緯

苗木遺跡の調査は、館林市苗木町字苗木西 2447-136、-326 の開発者松村善久氏の個人住宅建設に伴う事前確認調査であった。

館林市教育委員会では、松村氏の代理人より、開発に伴う同地の埋蔵文化財の取り扱いについて問い合わせを受け、協議を開始するとともに現地の確認を行った。

開発予定地は、南へ下る傾斜地上で、南側は盛り土により造成され、現況は畑地で遺物は見られなかった。しかし、周辺では若干の遺物散布が見られ、また同遺跡では調査経緯がないため、発掘調査を要すると判断され、再度代理人と協議を行い試掘調査を実施することで合意された。

調査の概要

傾斜地上となっていた開発予定地の中央南寄りに設定した東西のトレンチを1トレンチ、西側の南北のものを2トレンチとし、重機による表土除去後トレンチ内の精査を行った。

開発予定地には既に北側の高い部分に合わせて盛土がなされており、1mを超える掘削が予想された。調査の結果、1トレンチ東端では地表から地山となっていたロ



写真37 苗木遺跡調査前



写真38 苗木遺跡重機による掘削



写真39 苗木遺跡作業風景

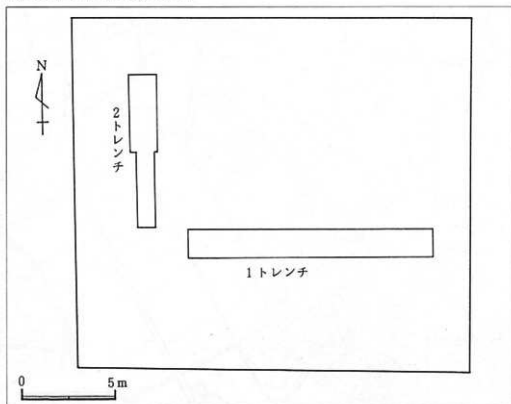
ーム面までは25cmで、西へ向かって徐々に傾斜し西端では70cmとなっていた。断面には東端より9m程の所までローム面の直上と造成土との間に耕作土層と思われる15cm前後の1層があり、造成以前はローム面を削る耕作が行われ、造成に際して西側部分は耕作土を含めて削られた様子が窺われた。2トレンチには造成土下に分厚い攪乱層があり、かなりの広がりがあり



写真40 苗木遺跡調査区全景

想されたため、トレンチ幅を小さくして掘削を続けたが、攪乱は2トレンチ全体にわたっていた。いずれのトレンチからも遺構、遺物は確認されなかった。

開発予定地を含めた周辺はローム土が露出し、既にかかなりの削平を受けローム層を削って耕作が行われていたものと思われる。



第16図 苗木遺跡調査区全体図

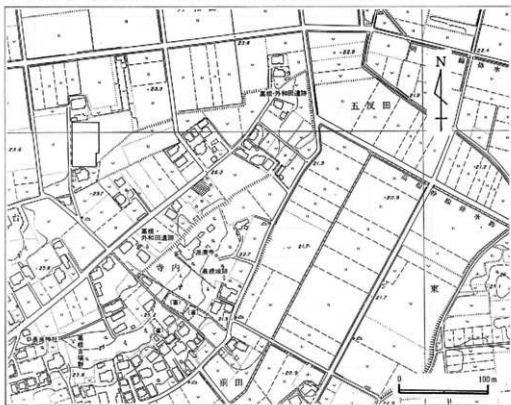
第6節 高根・外和田遺跡(たかね・そとわだいせき)

立地と環境

高根・外和田遺跡は、館林市の北部、東武鉄道佐野線渡瀬駅の北西約1.5 kmにあり、邑楽・館林台地の北縁に沿って走る内陸古砂丘の東端台地上からその北側の微高地へかけての遺跡である。北方から東方へかけて渡瀬川の氾濫原である沖積低地が広がり、南側には高根幹線排水路に沿って台地を西から開析する小さな谷がある。

当遺跡は、「館林市の遺跡」には縄文時代及び古墳時代から平安時代へかけての遺物散布の見られる埋蔵文化財包蔵地として記載され、一部中世城館址の高根城跡と重複している。昭和41、42年に行われた調査では、古墳時代の住居址4軒などが確認されている。周辺には、南西に接して高根古墳群、西方に縄文土器、土師器片の散布する梅木山遺跡、南側には前述の谷を越えた台地上に古墳時代から平安時代の大道北遺跡、奈良時代から平安時代の新倉前遺跡などがある。

開発予定地は、馬の背状になっている古砂丘の尾根の南側で畑地となっていた。西方には国道122号線、主要地方道足利・館林線などの幹線道路が走っている。



第17図 高根・外和田遺跡周辺図

経 緯

高根・外和田遺跡の調査は、館林市高根町字寺内 108-20 の開発者清水利行氏の個人専用住宅建設に伴う事前確認調査であった。

館林市教育委員会では、清水氏の代理人より同地の開発に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて問い合わせを受け、協議を開始するとともに現地確認を行った。

開発予定地は畑となっており、周辺の畑地も含めてローム土が露出していた。該地では若干の遺物が見られ、またかつての調査で住居址が確認されていることから、事前に発掘調査を要すると判断されたため、再度代理人と協議を行い試掘調査を実施することで合意された。

調査の概要

開発予定地の中央やや南寄りと道路に面する北側の2カ所にトレンチを設定した。南側のものを1トレンチ、北側のものを2トレンチとし、トレンチ精査後、両トレンチの中央東側に3トレンチを設定した。表土除去には重機を使用した。

調査の結果、1及び3トレンチでは表土の直下10cm程でローム面に達したが、2トレンチでは1m



写真41 高根・外和田遺跡調査前



写真42 高根・外和田遺跡重機による掘削



写真43 高根・外和田遺跡作業風景

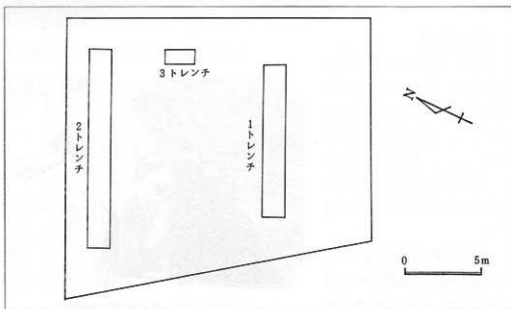


写真44 高根・外和田遺跡1トレンチ



写真45 高根・外和田遺跡2トレンチ

程の深さがあった。約20cmの表土層の下には旧耕作土層と思われる黒褐色土の堆積があり、更に同様な黒褐色系土からローム層となっていた。2トレンチ付近で急な傾斜となっている様子であったが、これが自然地形によるものか、道路工事等による攪乱であったかは判然としなかった。いずれのトレンチからも遺構、遺物は確認されなかった。



第18図 高根・外和田遺跡調査区全体図

参 考 文 献

- 館林市教育委員会 館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 諸集
館林市教育委員会 「茂林寺沼及び低地湿原調査報告書 第2集」
館 林 市 「館林市誌 歴史篇」
館 林 市 「館林市誌 自然篇」
館林市立図書館 「館林双書」
群馬県教育委員会 「群馬県の遺跡」
群馬県教育委員会 「群馬県の中世城館跡」
群 馬 県 「上毛古墳総覧」
板 倉 町 「板倉町史」
大 泉 町 「大泉町史」
群 馬 県 林 務 部 「群馬県の貴重な自然 地形・地質編」
群 馬 県 「群馬県史」
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 発掘調査報告書諸集

抄 録

ふりがな	たてはゆししなけい いきまきほつくつちよりうきほろこくしよ							
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	—							
巻次	—							
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	28集							
編著者名	川 島 孝 男							
編集機関	館林市教育委員会							
所在地	〒374 群馬県館林市城町1-1							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大道北A	筒野町琴大道北	10207	13	—	—	1994 1994	25	個人専用住宅
大道北B	筒野町琴大道北	10207	13	—	—	1994 1994	36	個人専用住宅
天神	琴架波高天神	10207	29	—	—	1994 1994	290	集合住宅
館林城	朝日町	10207	33	—	—	1994 1994	70	宅地造成
下	官筒町琴覚徳覚	10207	2	—	—	1994 1994	100	個人専用住宅
苗木	苗木町琴苗木西	10207	95	—	—	1994 1994	30	個人専用住宅
高根・外和田	高根町琴等内	10207	11	—	—	19950 19950	37	個人専用住宅
遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大道北A	—	近世 ～近代	土 坑	1基	軟質陶器片・陶磁器片			
大道北B	—	—	—		—			
天神	—	中世 ～近世	溝状遺構 井 戸	3本 1基	板碑片・五輪塔片			
館林城	土 壘	近 世	土 壘		縄文土器片			
下	古 墳	古 墳	周 溝		土師器一坏、壺、手捏土器 須恵器一大甕、甕			
苗木	—	—	—		—			
高根・外和田	—	—	—		—			

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第28集

館林市内遺跡発掘調査報告書

発 行 館 林 市 教 育 委 員 会

印 刷 所 中 塚 印 刷 所

発行年月日 平成7年3月31日